ビガー・トマスの誕生
――『アメリカの息子』覚え書き――

斎藤忠利

リチャード・ライト(Richard Wright)(一九〇八年～一九六〇年)の代表作『アメリカの息子』(*Native Son*)(一九四〇年)は、一般に、シカゴのスラム街で生活したライト自身の体験と、一九三八年の五月に白人の女性(消防夫の妻で、その名はフロレンス・ジョンソン)を殺害して処刑された十八歳の黒人少年ロバート・ニクソン(Robert Nixon)の事件をもとにしたもの、とされている。[1] しかしながら、ライト自身が『アメリカの息子』の制作事情を解説した「どのようにして『ビガー』は生まれたか」('How "Bigger" Was Born')(一九四〇年)[2]によれば、『アメリカの息子』の主人公ビガー・トマス(Bigger Thomas)は、ライトがその幼年期から目撃していた何人もの「ビガー」――アメリカ白人のいわゆる「ろくでなしの黒ん坊」('a bad nigger')――を代表する人物として造形されたものであり、[3] また、ロバート・ニクソンの事件が起こった時、ライトは『アメリカの息子』の最初の草稿をすでに半分ほど書き上げていた。そこで、そのような事実をふまえて、ビガー・トマスとは何者なのか、ビガー・トマスがアメリカという土地に生まれついた人間('a native son')と呼ばれるのは何故か、という問題を、上述の「どのようにして『ビガー』は生まれたか」を手掛かりとして考えてみたい。これが、この小論の目的である。

＊　＊　＊　＊　＊

ライトは、「どのようにして『ビガー』は生まれたか」の中で、まず自作の『アメリカの息子』について完全な解説は行なえないことを断わったのち、『アメリカの息子』の素材となったものの説明に移り、「ビガー・トマスの誕生は、わたしの幼年期にまで遡るが、ビガーはただの一人というのではなく、何十人ものビガー、数えきれないほどの、意外なほど多数のビガーが存在した」と書き、そう書いたあとでライトは、「ビガー一号」から「ビガー五号」まで、五人のビガーを紹介している。[4]

「ビガー一号」は、ライトがミシシッピ州ジャクソンで幼年期を送っていた頃、ライトやその遊び友達の遊具を巻き上げて、ライトたちの恐怖の的となった黒人の悪童で、ライトは、この「ビガー一号」の強烈な印象が忘れ難かった、それは自分がこの悪童のようになりたいと、ひそかに願っていたためであろう、という意味のことを言っている。

「ビガー二号」は、ライトが少年になってから知り合った十

七歳位の黒人少年で、その手強さは「ビガー一号」の比ではなかったが、ライトや他の黒人少年に暴力を加えることはなく、アメリカ南部を支配している白人たちを敵にまわして、白人所有の小屋に住みながら、その部屋代を払おうともせず、白人たちは何でも持っているが黒人の自分は無一物だ、と言うのが口癖だった。ライトとその仲間たちは、「ビガー二号」の意見に内心ひそかに同意はしたものの、その生き方について行くことはできなかった。このように自分の生きたい生き方をした「ビガー二号」は、結局、刑務所暮らしをすることになった。

「ビガー三号」は、白人たちのいわゆる「ろくでなしの黒ん坊」で、一時ライトがもぎりとして働いていた黒人専用映画館にやって来ては、入場券なしで押し入った。映画館の経営者は、歯ぎしりをして、「そのうち、あの忌ま忌ましい黒ん坊は殺してやる」と息巻いたが、それだけのことで、「ビガー三号」は手がつけられなかった。しかし、その後、「ビガー三号」は、密造酒を運ぶところを白人の警官に発見されて、射殺されている。

つぎに「ビガー四号」は、アメリカ南部の「ジム・クロウ・ローズ」(Jim Crow laws)(黒人を差別するための諸法律。)を無視し、肉体労働を嫌って定職もなく、書物を読み耽って白人たちの挙動を模倣しながらも、自由な人間にはなれないと観念し、「白人たちは俺たち黒人に何一つさせてはくれない」と呟いて塞ぎ込んでしまうのが常であった。このような黒人少年の運命は、精神病院行きであった。

最後に「ビガー五号」は、いつも市電に無賃乗車し、ある時などは白人用の座席に平然と坐り込んだ。車掌がやって来て、黒人用の座席に移るようにと命ずると、ナイフを振りかざして、移せるものなら移してみろ、とやり返した。車掌は憤激して、悪態をつくが、手は出せずに引き下がり、白人の乗客たちも、「あれは、ビガー・トマスの奴だ。手出しはしない方がいい」と言うだけで、何事も起こらなかった。「ビガー五号」がどうなったかは不明だが、想像はつく、とライトは言う。

このように「ビガー・トマス」は、白人優位のアメリカ社会に徹頭徹尾反逆して、あげくの果てには、アメリカ社会を支配している白人たちから厳しい仕打ちを受けるアメリカ黒人のことであって、射殺されるか、縛り首になるか、リンチを受けるか、追いつめられて死ぬか、意気阻喪するかしかない。

それでは、「ビガー・トマス」を生むアメリカ社会の情況はどのようなものであろうか。それに答えて、ライトは、まず、南北戦争以後の徹底した黒人隔離政策を指摘する。この隔離政策は、南北戦争後に黒人に与えられた選挙権の剝奪から始まって、黒人に対する教育の制限、警察力や州民軍からの黒人の締め出し、黒人居住地の隔離、公共の場所における黒人差別、就業の制限などの形をとり、このような黒人差別を正当化するために白人種優位の原理をイデオロギーとして確立するに至っている。

ところが、その一方で、アメリカ黒人は、アメリカ黒人を締め出そうとするアメリカ文明そのものによって作り出された人

間であることから、アメリカ黒人に対する抑圧は、アメリカ黒人の間に、その抑圧に真っ向から反逆する者から、その抑圧に順応する者に至るまで、さまざまの反応を生む結果となる。従って、「ビガー・トマス」は、アメリカ黒人に対する抑圧への反応の一形態に他ならないのである。とは言え「ビガー・トマス」の反逆の理由を、一定の行動原理に基づいて説明することはできない、とライトは言う。しかしながら、ライトによれば、「ビガー・トマス」の性格形成には二つの心理的な要因が働いており、まず第一に、「ビガー・トマス」は、なんらかの事情によって、アメリカの黒人種との連帯感を失っており、第二に、耳目を奪うアメリカ文明の魅力に心を惹かれている。換言すれば、「ビガー・トマス」の性格を規定しているものは、疎外感と欲求不満ということになり、これは、程度の差こそあれ、ライト自身を含めてアメリカ黒人全体に共通している問題である、と言っても過言ではなく、アメリカ黒人は、潜在的に「ビガー・トマス」を自らの内に住まわせている、ということになろう。

ところで、ライトが「ビガー・トマス」の小説化を思い立ったのは、ライトがシカゴに移り住んでからのことであるが、それは、一つには、ライトがアメリカ南部の社会的な圧力から逃れて、「ビガー・トマス」をその内部に住まわせている自己自身を客観的に眺めることができるようになったためであり、いま一つには、都会生活の中で労働運動とそのイデオロギーに接するようになったライトが、「ビガー・トマス」の意味するものを的確に摑むことができるようになったためであって、ライトは、「ビガー・トマスがいつも黒人であるとは限らない。ビガーは白人でもあるのだ。そして、いたるところに、文字通り数百万人のビガーが存在している。そのことを私は発見した」と言っている。

これは、「ビガー・トマス」の問題が、アメリカ黒人の人種的・民族的な問題たるに留まらず、アメリカ社会一般の政治的・社会的な問題としての地平と広がりをも持つ、という認識に到達したことを表明したものであって、アメリカ黒人の「ビガー・トマス」を、アメリカ生活を象徴する人物、アメリカの未来を予言する人物として小説化しようとするライトの年来の意図が、ここに実現を見ることになるのである。

もちろん、「ビガー・トマス」の小説化にあたって、ライトは、シカゴで知り合った白人作家たちとその作品から多くのものを学んでいる。その中でも特にライトの記憶に強く残っていたのは、イギリスに亡命中のゴーリキーとレーニンの友情を伝える小冊子で、その小冊子によれば、この二人がロンドンの街を歩いていた時、レーニンがゴーリキーにむかって、「これが彼らのビッグ・ベン」、「あれが彼らのウェストミンスター寺院」、「あれが彼らの図書館」と言いながら、ロンドンの名所旧跡を紹介した、と言われる。ライトは、このエピソードによって、アメリカ黒人とアメリカ社会との関係に対する理解を深め、「これこそビガーだ。これがビガー・トマス的な反応だ」と結論を下す。

ここで問題になっているのは、ことわるまでもなく、亡命中

のイギリスでレーニンが味わった余所者意識ないしは疎外者意識である。「ビッグ・ベン」も、「ウェストミンスター寺院」も、「図書館」も、すべて、「彼らのもの」であって、「自分のもの」ではない。どのように高度な文化も伝統も、自分には無縁である、という感覚――この感覚を、ライトは、ビガー・トマス的な感覚と呼ぼうとするのである。

〔因みに、このようなビガー・トマス的感覚は、形而上学的な人間存在の不条理性に対する極めて現代的な感覚に通ずるものを持っており、現に、ライトは、人間存在の不条理性の問題を、『局外者』(*The Outsider*)(一九五三年)、『残酷な休日』(*Savage Holiday*)(一九五四年)などの長編小説において追求している。ライトが、アメリカ黒人としての生活体験の中から、実存主義哲学の世界観に近いものを摑み出していることは、注目に値する。〕

ここに至って、「ろくでなしの黒ん坊」の造形化として始まった「ビガー・トマス」は、人間らしく生きることを否定された、疎外された人間として小説化されることになる。とすれば、「ビガー・トマス」は、もはや、アメリカ黒人はおろか、アメリカの白人でさえある必要はなくなり、たとえば、帝政下のロシヤ人、ナチス体制下のドイツ人であってもよいことになろう。それをあえて、そのような人間としてアメリカ黒人を描こうとするのは、アメリカ黒人が最も徹底的な人間疎外の犠牲者である、とする認識がライトの中にあったからであろう。そこで問題は、結局、アメリカ黒人とは何者か、という根本問題に帰着することになる。

この根本問題に対して、ライトは端的に答えて言う――アメリカ黒人とは、「アメリカの産物、この土地(アメリカ)に生まれついた人間」('an American product, a native son of this land')である、と。アメリカ黒人がアメリカ社会の社会的な産物であることは、その過去を殆ど完全に絶ち切られた黒人奴隷として新しい大陸で生きることを強いられたアメリカ黒人が、アメリカ建国のそもそもの最初から、新大陸の価値体系の中で生きのびてきた、という事情によるのであって、エドワード・マーゴリーズも言うように、「疑いもなく、アメリカ黒人は、自己の正体を作り直すために、もっぱらアメリカの環境だけに頼らざるを得なかった唯一のアメリカ人なのである[5]」白いアメリカ人は、どのような形でアメリカ大陸に渡ってきたにせよ、少なくとも、かつての祖国の価値体系を反定立とすることによって、自己確認を行なうことができた。しかしながら、アメリカ黒人は、その意志に反してアフリカ大陸から拉致された人間として、白いアメリカ人がアメリカ大陸に携えてきた文化的・精神的遺産にあたるものを殆ど持たず、奴隷主の言葉で自己を語るしかなく、白人優位のアメリカ社会の底辺に人為的に位置づけられて、自己の内なるアフリカを恥じざるを得ない状況に追い込まれてきた。このような意味において、アメリカ黒人は、文化史的、精神史的に言って、アメリカ新大陸において作り出された人間であり、誤解を恐れずに言えば、最もアメリカ的なアメリカ人なのである。

そこで、ライトがアメリカ黒人を「生粋のアメリカっ子」(a native son)と呼ぶことには、異論のあろうはずがないのであるが、アメリカ黒人が「生粋のアメリカっ子」であるならば、アメリカに生まれついた人間に当然具わっている生得の権利というものがあるわけで、そのようなアメリカ人としての生得の権利を、「生粋のアメリカっ子」たるアメリカ黒人が奪われているところに問題があることになり、そのような生得の権利を奪われているアメリカ黒人を、あえて「生粋のアメリカっ子」と呼ぶところに、ライトの皮肉な意図があったと見ることもできる。(6)

だがしかし、「どのようにして『ビガー』は生まれたか」の中で明らかにされる「ビガー・トマス」の問題は、すでにふれておいたように、アメリカ人としての生得の権利を奪われているアメリカ黒人をも含めて、普遍的、一般的に疎外された人間の問題であった。従って、「ビガー・トマス」の誕生をめぐって真に問われなければならない問題は、アメリカ黒人をはじめとする疎外者集団を、「生粋のアメリカっ子」として生み出さざるを得ないアメリカ社会の矛盾ということになろう。

この問題は、このような小論で取り扱うにはあまりにも大きな問題で、本格的なアメリカ論の試みを通じて考究されるべきものであろうが、かりにここで私見の一端を述べておけば、「生粋のアメリカっ子」がアメリカ社会における疎外者でしかあり得ないという皮肉な状況は、最も基本的には、移民社会としてのアメリカ社会の人為的・人工的な性格に基因すると思われる。しかも、アメリカ黒人は、そのようなアメリカ社会の人為的・人工的な性格を集中的に背負わされているアメリカ人であって、それ故にこそ、アメリカ黒人の疎外状況は深刻の度を加えることになるのである。

なお、「ビガー・トマス」の誕生は、アメリカ社会の都市化との関連からも論じられなければならない問題であり、(7) そのためには、たとえばシカゴにおける黒人生活の実態を調査・研究した『黒い都会』(St. Clair Drake & Horace R. Cayton, *Black Metropolis*)(一九四五年)などを充分検討する必要があるので、その議論は他日を期することにしたい。

(1) たとえば、*The Reader's Encyclopedia of American Literature* の 'Wright, Richard' の項目を参照。

(2) 'How "Bigger" Was Born' は、最初、一九四〇年の三月七日に、ハーレムのニューヨーク公共図書館における講演として口頭発表されたが、のちにパンフレットの形で出版された。ここでは、*Black Voices: An Anthology of Afro-American Literature* (A Mentor Book) (1968) に再録されたものを典拠としている。

(3) 因みに、'Bigger' は、'a bad nigger' の一般的な呼び名として定着しているふしがある。'Bigger' に 'a bad nigger' の含意があることは、その語形から見て疑い得ないところである。

(4) 以下の叙述は、'How "Bigger" Was Born' (*Black Voices*, pp. 528～563) に述べられているところをまとめ

たものである。

(5) Edward Margolies, *Native Sons*, p. 15.

(6) *Cf.* Carl Milton Hughes, *The Negro Novelist*, pp. 50～51.

(7) この問題は、一応、'How "Bigger" Was Born' の中でも触れられているが、ライトは、上述の『黒い都会』(*Black Metropolis*)(一九四五年)に寄せた「序文」の中で、「もし私の小説『アメリカの息子』を読んで、ビガー・トマスの実在を疑われるのならば、この書物の中に引用されている犯罪率を調べてみるがよい」と言い、「ビガー・トマス」の誕生はアメリカ社会の都市化との関連からも考えるべきことを示唆している。

(一橋大学助教授)